

(日置郡吹上町大字入来字塚ノ越)

位置と環境

遺跡は、町の南部で海岸近くに広がる入来台地上に位置する。この台地は、平坦で広大な台地で、全域が遺跡となっている。海岸まで約1kmを測る。

本遺跡は、台地北東縁辺部で、標高約15～20mのところにある。伊作川との比高差約11mを測る。

調査の経緯

遺跡は、本町の吹上地区での県営特殊農地保全整備事業に伴う分布調査で、遺跡の存在が判明した。

その結果、本町教育委員会は、昭和62年および平成元年に県教育委員会の協力を得て、確認調査を実施した。その後、平成元年の塚ノ越遺跡ほかの調査では、旧石器時代、縄文時代、古代、近代との複合遺跡であることが判明した。

調査の概要

塚ノ越遺跡では、旧石器時代ナイフ形石器文化期の遺物と礫群をはじめ、縄文時代草創期・早期と奈良～平安時代の遺物、近世の遺物と土壌墓などが発見された。

特に、注目されたのは薩摩火山灰層（約1万1千年前）の直下の9層から発見された縄文時代草創期の遺物群で、鹿児島県の縄文時代の始まりを知るうえで、貴重な発見となった遺跡である。

旧石器時代の遺物と遺構

調査は、遺跡北側に設定したトレンチの9層最下



第2図 トレンチ配置図



第1図 塚ノ越遺跡の位置

部から、旧石器時代ナイフ石器文化期の遺物と集石を発見した。

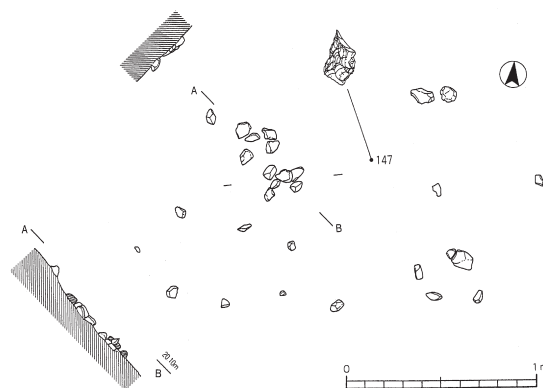
集石は、砂岩が主で、2m四方に散見した状況で検出された。遺物は、黒曜石製の台形石器と三稜尖頭器とが、1点ずつが出土した。この三稜尖頭器は、集石と同じ高さで出土した。

吹上町では、旧石器時代の遺跡が良好な形で発見されたのは初見である。この間、本町で最古の遺跡となっている。

縄文時代草創期の遺物

調査は、遺跡北側に設定した2つのトレンチにおいて、薩摩火山灰層直下の9層上部から、土器や石鏃をはじめ、ピエス・エスキュー、スクレイパー、磨石等が発見された。

9層出土の土器には、隆帯文土器が含まれ、縄文時代が始まった頃の草創期前半の土器である。特に、石鏃や磨石は、隆帯文土器ともに出土したことで、縄文時代草創期の様相を知るうえで大きな発見であった。



第3図 20トレンチ9層検出集石

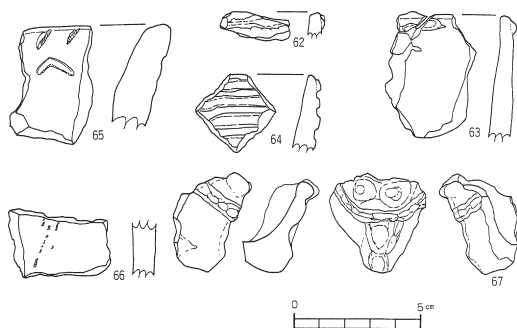
縄文時代早期の遺物

縄文早期遺物は、円筒形貝殻条痕文土器、塞ノ神式土器、桑ノ丸式土器、前平式土器などの土器が出土している。

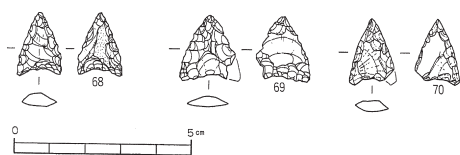
最も注目されたのは、早期の壺形土器と磨製石鏃の発見である。それまでは、壺形土器と磨製石鏃は弥生時代になって使用されたもので、縄文時代は存在しないとされていた。ほかの縄文時代早期の遺跡で、壺の破片らしきものが発見されていたが、当遺跡から口縁部の良好な破片が出土し、縄文時代早期の壺形土器の存在が明らかになった。その後、上野原遺跡で完全な形の早期の壺形土器が発見されている。また、磨製石鏃も出土例はあったが、当遺跡で前平式土器と共伴した状態で出土したことにより、早期に磨製石鏃が作られた可能性が高くなった。

特徴

本県においては、近年の発掘調査により、縄文時



第4図 19トレンチ9層出土土器



第5図 19トレンチ9層出土石鏃



写真1 塚ノ越遺跡全景

代草創期・早期において、全国に先駆けて縄文文化が発達したことが証明されつつある。石鏃や磨石などの早い時期からの使用、定住が始まりムラの存在が、南九州では早い時期に始まっている。特に草創期の隆帯文土器はほかの地域に比べ、多くの遺跡で出土している。

本遺跡は、旧石器時代から縄文時代への変遷を知ることができる遺跡で、調査の規模は小さかったものの、南九州の縄文文化の先進性をいち早く証明した遺跡である。

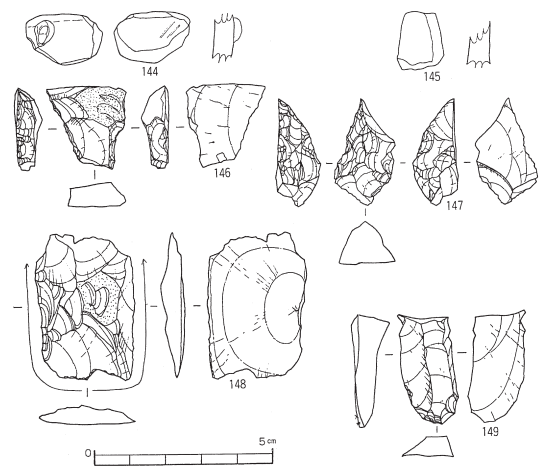
資料の所在

出土遺物は、吹上町教育委員会に保管されている。

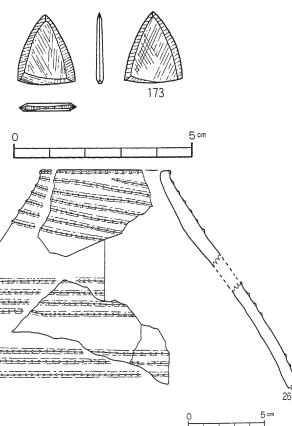
参考文献

吹上町教育委員会1990「塚ノ越遺跡ほか2遺跡」『吹上町埋蔵文化財発掘調査報告書』4

(常田和彦)



第6図 20トレンチ9層出土遺物



第7図 早期の壺形土器と磨製石鏃